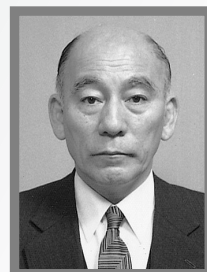


追悼

剛毅でありながら人に優しく

—— 秋知和憲先生追悼記

会員 福家 辰夫



故 秋知和憲 会員
2005年8月22日ご逝去・77歳
1978年度東京弁護士会副会長

秋知先生は、剛毅でありながら常に人に優しく、多くの会員、特に後輩からの敬愛を一身に集められた。

この先輩を失うことが、東弁の後輩にとってどれほど大きな損失となるか計り知れないものがあることは十分予知していたつもりではあったが、惜別の念がこれほど大きなものであるとは、予感もしていなかった。

先生は、20年位前から糖尿病に患い、入退院を繰り返しながら療養にもつとめていた。

2004年9月に行なわれた春秋会50周年に出席された際のお姿をみて、ずいぶんとやつれられたようにお見受けし、後輩達は驚き心配した。お会いして話をしているうちにいつもの陽気な笑顔を絶やさない姿に接し、我々はつい安心し、きっとまた元気になれるだろうと思い込んでしまい、まさかこんなに早く亡くなられるとは思っていませんでした。

先生は、弁護士会活動において極めて大きな足跡を残された。

東弁副会長時には、いわゆる弁護士抜き法案が国会に上程され、その阻止運動に日夜を徹して邁進し、その廃

案の極めて大きな原動力となったことは、皆の知るところである。また、連続射殺事件の永山則夫の弁護人を引き受け、その支援者との間の極めて厳しい軋轢の中で弁護人の職務を全うしたことは、我々会員に深い感銘を与えるものであった。

弁護士会館建設にあたっては、会館建設実行特別委員長に就任され、会館建設の計画を樹立し、建設の主要な実務を担われた。また、交通事故相談センターの相談者が減少し交通事故対策委員会や相談センターが廃止の危機に陥っていたとき、委員長兼支部長に就任し、ラジオによる宣伝を採用し見事にこれを立ち直らせたこと等々、その先見性と実行力に秀でていたことは、今振り返っても余人の追隨できないものがある。

今でも思い出すのは、いつもにこにことして大きな声で我々後輩を励まし冗談を言っている姿や、選挙のときに罵声を張り上げて仲間を叱咤激励している姿である。

遠からず、私達後輩も先生の跡を追って、死後の世界に行くことになる。その時は、「おお、来たか」とあの笑顔で迎えてくれることと思う。

SLにまたがって宇宙を驀進

—— 伊豆鉄次郎先生追悼記

会員 二宮 忠



故 伊豆鉄次郎 会員
2005年10月22日ご逝去・73歳
1992年度東京弁護士会会長

「ヴーッ」「ヴワッフ、ヴワッフ、ヴワッフ、ヴワッフ」遠く、小さく汽笛と煙を吐く音が聞こえ、それが少しずつ大きくなって近づいてくる。目の前を驀進するとき耳をつんざく轟音と汽笛、やがてまた少しずつ遠ざかって行き、かすかに「ヴーッ」という汽笛を残して消えて行く。2005年10月22日伊豆鉄次郎先生はこの汽笛のように逝かれた。73歳であった。同月27日通夜、同月28日告

別式が執り行なわれ、祭壇には先生のふくよかで人懐っこく微笑まれた写真とそれを取り巻くように春夏秋冬の景色の中を勇躍走る蒸気機関車の写真が飾られ、自らが録音されたという冒頭の汽笛などが流れていた。ご遺族のこの暖かい心遣いは先生のこの世での最後の場として大変ふさわしいと思うとともに悲しくもあった。

先生が蒸気機関車をカメラに収められるようになった

のは、古いことである。1969年にはご長男と北海道へ、また家族と共に国内のいたるところへ撮影旅行に行かれている。更には奥様とご一緒に印度をはじめ、諸外国へも。家族を大切にされていた一面でもある。事務所には法律書と共に鉄道に関する国内外の書籍がぎっしりと書棚を飾っている。カメラを設置し、来るであろう蒸気機関車を待つ緊張感、期待感は何にも代え難いと話されていたことを思い出す。

このように書く趣味人であったかにみえるが、会務にも熱心であった。私心はなく、常に弁護士会や、司法界はいかにあるべきかを考えておられた。会長時代で特筆されるのは会館建設問題である。三会の利害の調整が難航していたとき、着工時を決定することが先決であると主張されて、まずこれの決定を成功させた。まもなく、その他の問題も解決し、着工の運びとなった。更には、建設資金の調達方法として事件の依頼者・顧問先などから直接会へ寄付してもらう方法を考案され、順調に資金の調達ができた等である。先生の写真集には四季折々の、またあらゆる角度からの会館の雄姿が収められている。感慨ひとしおだったのであろう。

叙勲について一言、生前に叙勲の話があったが、受けることを断られた。たとえ単位会であっても4000人以上の会員を擁する会の会長が日弁連副会長以下の序列に置かれるのは承服できないということである（当時はいわゆる分離副会長制度で、先生は日弁連副会長に就任されていない）。

常に東弁の対外的地位の向上にも努められた一端でもある。

先生の言動には強い信念と徹底したところがあった。

今頃は銀河鉄道999ばかりにSLにまたがって宇宙を驀進しておられることであろう。

惜しい人を失ったものである。あまりにも早すぎた。合掌

■追記

本稿を校正していて驚いた。伊豆先生と秋知先生は同期（11期）、同修習地（大阪）で、大変仲が良かった。そして、共に東弁の改革に尽力されたこのお二人の追悼文が同誌面に掲載されるとは…。伊豆先生が秋知先生を追ったように思えてならない。天国でも「アキちゃん」「テッちゃん」と仲良くしておられることだろう。